

## 故 安原 昇 先生



### 主な経歴

昭和10年 8月22日 出生

昭和34年 3月 広島大学教育学部教育学科卒業

昭和34年 11月 矢野町教育委員会社会教育主事

昭和44年 7月 国立社会教育研修所専門職員

(昭和46年 8月～12月総理府事務官兼官)

昭和49年 10月～昭和50年 3月および昭和51年 4月～10月横浜国立大学教育学部講師併任)

昭和53年 10月 香川大学大学教育開放センター助教授

昭和58年 5月 同教授

平成11年 3月 停年退職

平成11年 4月 香川大学名誉教授称号授与

平成11年 11月 社会教育功労者表彰

平成26年 12月27日 逝去

従四位 瑞宝中綬章

## 安原昇先生の逝去を悼んで

謹んで安原昇先生の御霊に哀悼の辞を捧げます。

安原先生は香川大学生涯学習教育研究センターの前身に当たる香川大学大学教育開放センターの初代教員として昭和53年10月に採用されました。それから21年間の長きにわたり勤め上げ、わが国の生涯学習・社会教育の一時代を築き上げられました。今にして思えば、近くにお住まいだった先生にもっと教えを乞えばよかったと後悔ばかりが頭をよぎります。

さて、私がまだ大学院生として英国のユースワークを研究していた頃、本センターに所蔵されていた Youth in Society という雑誌を貸し出して下さったのが安原先生との最初の出会いでした。ちょうど四半世紀前になります。その後、私が島根大学に勤務している時、旧東出雲町の生涯学習まちづくりのシンポジウムでご一緒する機会を得ました。大学教員駆け出しの私は、レジユメにびっしり文字を詰め込んで張り切って前日の打ち合わせに臨んだところ、「あなたは地域住民のことを全く理解してないね。もっとシンプルに書き換えなさい！」と叱られました。社会教育の現場での振る舞い方を手厳しく指導された貴重な経験でした。

その後も何度か仕事をご一緒しましたが、私も成長したのか、それ以降は失態を晒すことはなく、思い出すのは穏やかな談笑の場面のみです。基本的にはとても面倒見の良い優しい先生でした。まさか、安原先生がご退官なさった後に私が赴任するとは夢にも思っていませんでしたが、気がつく先生の敷いたレールを先に延ばす仕事に就かせていただいていた。今後は先生の遺志を引き継ぎ、本センターをさらに発展させるよう、決意を新たにしましたところ。

最後になりますが、ここに改めて先生の偉業を称えますとともに、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

清國祐二（香川大学生涯学習教育研究センター長）

## 主要業績一覧

社会教育の内容と方法－上－（基礎講座－1－）、『社会教育』25（1）、1970年、pp.40～44.

社会教育の内容と方法－下－（基礎講座－2－）、『社会教育』25（2）、1970年、pp.52～57.

社会教育施設の経営－上－（基礎講座－5－）、『社会教育』25（5）、1970年、pp.42～46.

ボランティア活動への招待（基礎講座 ボランティア活動入門－1－）、『社会教育』26（2）、1971年、pp.50～53.

コミュニティづくりとボランティア活動（基礎講座 ボランティア活動入門－2－）、『社会教育』26（3）、1971年、pp.46～49.

ボランティア・グループづくりABC（基礎講座 ボランティア活動入門－3－）、『社会教育』26（4）、1971年、pp.46～49.

ボランティア活動を志す人びとに（基礎講座 ボランティア活動入門－4－）、『社会教育』26（5）、1971年、pp.44～47.

婦人の余暇とボランティア活動（基礎講座 ボランティア活動入門－5－）、『社会教育』26（6）、1971年、pp.46～49.

ボランティア活動計画のたてかた－上－（基礎講座 ボランティア活動入門－6－）、『社会教育』26（7）、1971年、pp.48～51.

ボランティア活動計画のたてかた－下－（基礎講座 ボランティア活動入門－7－）、『社会教育』26（8）、1971年、pp.44～47.

ボランティア活動の方法：コミュニティ形成における学習と運動（基礎講座 ボランティア活動入門－8－）、『社会教育』26（9）、1971年、pp.44～47.

住民組織の中のボランティア活動（基礎講座 ボランティア活動入門－9－）、『社会教育』26（10）、1971年、pp.60～63.

リーダー養成のための研修計画のたて方——青少年指導者研修を中心に（基礎講座ボランティア活動入門－10－）、『社会教育』26（11）、1971年、pp.42～46.

社会教育主事の職務内容と専門性に関する資料（文献案内）（特集・社会教育主事の職務）、『社会教育』27（7）、1972年、pp.20～24.

社会教育主事の職務内容と専門性に関する資料（文献案内）、『社会教育』27（7）、1972年、pp.20～24.

現代における社会教育施設の性格と機能、『社会教育』28（6）、1973年、pp.6～24.

社会教育職員実態調査の文献的研究、『日本の社会教育』18号、1974年、pp.164～175.

社会教育文献情報の収集・整理・活用——初心者のために（付 戦後社会教育文献目録-1-）（資料解説）、『社会教育』30（8）、1975年、pp.39～48.

戦後社会教育文献目録（資料）-2-、『社会教育』30（9）、1975年、pp.45～48.

戦後社会教育文献目録（資料）-3-、『社会教育』30（10）、1975年、pp.123～127.

生涯教育と社会教育施設（提言）、『社会教育』31（2）、1976年、pp.5～8.

公民館主要文献目録：特集のために、『月刊社会教育』20（7）、1976年、pp.89～91.

公民館略年表、『月刊社会教育』20（7）、1976年、pp.85～89.

現代公民館研究会編『公民館の使命と組織』（公民館経営ハンドブック：研修テキスト1）、安原昇・吉瀬純一・光安常喜著（湯上二郎監修）、日常出版、1977年.

現代公民館研究会編『公民館活動の企画』（公民館経営ハンドブック：研修テキスト3）、安原昇〔等〕著（湯上二郎監修）、日常出版、1977年.

宇佐川満論：その思想と社会教育施設経営論（社会教育論者の群像）、『社会教育』35（1）、1980年、pp.39～43.

香川大学大学教育開放センターの現状と課題、『教育調査』123号、1981年、pp.64～68.

大学と地域：大学開放講座の問題を中心にして、『日本の社会教育』27号、1983年、pp.189～200.

大学教育開放センターの事業：香川大学大学教育開放センター、『文部時報』1339号、1988年、pp.50～53.

公民館：青少年が「地域に生きる力」を育むために、『青少年問題』45（2）、1998年、pp.28～33.

社会教育40年大学開放20年・断章：公民館主事としての旅立ち、『香川大学生涯学習教育研究センター研究報告』4号、1999年、pp.131～136.

## 黎明期のセンター事情

(生涯学習教育研究センター30周年記念誌『30年のあゆみ』より)

私は、昭和53年4月に創設された香川大学大学教育開放センターに、同年10月から専任教員として、平成11年3月まで20年余勤務した。発足以来満30年を迎えられたことは、関係者の一員として、慶びにたえない。ただ、当時の資料を検索・確認できる現況にないので、いま想起できる二、三のことがらについて、記すにとどめたい。

年度途中から着任したセンターでは、すでに創設当初から経済学部又信記念館に仮設して講座開設など稼動していたが、施設は建築中であり、私は、教育学部の空き研究室をお借りして拠点とした。私は、国立社会教育研修所（現在の国立教育政策研究所社会教育実践研究センター）からの転入であり、大学勤務は初めてであった。幸い、昭和41年に文部省社会教育指導者海外視察団の一員として、ロンドン大学構外教育部などを視察して以来、成人教育や大学拡張に関心を持ち続けていたので、新しい職務の理解に努めることができた。

翌54年春に完成した新施設は経済学部構内にあり、経済学部研究室群と商業短期大学部との3階建て併設施設で、その1、2階の西側専用部分を使用することとなった。同名のセンターとしては、全国3番目であるが、新築の施設は全国最初のものであり、第1回大学教育開放センター研究協議会が本学で開かれたのもその熱意を示すものであった。総合大学化をめざす本学の学内共同利用機関としての役割が期待されたのである。

発足当初、センターの事務体制は、センター長を兼務する教員が所属する学部事務部に兼担していただいていた。その後、本部事務局から出向する主任の専任化や事務補佐員の常用、専任教員の複数化など人的整備が関係者の理解と努力によって実現した。

事業の主体は、公開講座の実施である。戦前からの系譜をもち、学校教育法や社会教育法に根拠規定をもつ大学の公開講座であるが、昭和56年度頃から講座の総称を「開放講座」と呼んだ時期がある。公開講座はセンターを有しない多くの大学でも実施されていたので、それらとはひと味違ったセンター独自の講座を実施したい思いからであったが、その理念の実現は難しかった。時間数による有料の問題、講師が学内資源である限定性など多くの問題があって、関係者の努力にもかかわらず、大都市の大規模な私学の講座等には圧倒される思いであった。

センター開設にともない、これまで教育学部で受託実施されていた社会教育主事講習をセンターで実施することとなったが、私には研修所時代に多様な経験があり、企画実施を得意とする領域であった。このことと連動して、教育学部に私が助力し、社会教育主事任用資格が学部在学中に得られる課程がひらかれた。

昭和57年には学内教員を対象に大学教育の開放等に関する意識調査を、59年には、香川県教育委員会の受託事業として県民の生涯学習調査を行った。昭和62年には生涯教育に関する有識者調査を行うなど地域の学習ニーズの把握につとめたが、小さなセンターでは、多様化する生涯学習黎明期の要請に応え得べくもない。そこで、センターが学習者を公募するだけでなく、学習者の集まる場所、学習者を組織するところ、学習者を啓発するところへ気軽に出かけていった。

学校週五日制が実施されるころ、子ども向けキャンペーン事業として、「パソコンと遊ぼう」といった



呼びかけでイベントを実施したところ、多数の小学生がセンター講義室につめかけてくれ、スクリーン上でゲームなどを楽しんだことがあった。高松市生涯学習フェスタ実行委員長や高松商工会議所生涯学習振興運営委員長などとして、多様な市民が講座型でない学習機会を求めていることを知ることもできた。学習は楽習である。

平成3年度から、生涯学習教育研究センターと改称されることとなった。この名称を冠した全国最初のセンターとなり、後発の多くのセンターがこれを継承することとなるが、大学開放の呼称を改めなかったセンターも若干存する。文部省からこの素案に意見を求められたとき、私は、学習と教育が続くので開発の用語を使用してはと具申したように記憶しているが、他の大規模な研究センターで多用されているからと認められなかった。今日では、本学に大学教育開発センターも設置され、教育基本法第三条に生涯学習が規定されたことでもあり、現行の名称で違和感を感じないまでになっている。ただ、大学開放と生涯学習はイメージとしても大きく異なる。センターや生涯学習関係者には常識だとしても、学内研究者の多くが生涯学習外にあることを自戒しなければと、今なお思う。

センターが改称されてから、それにふさわしい講座として、専任教員が担当する生涯学習実践講座、生涯学習指導者講座、生涯学習推進専門講座等を開講するようになった。私が担当した講座の受講生には、文学に造詣が深い名作家や社会的成功者、超高齢者がおられたりで、成人学習者の奥深さに感嘆したことも多かった。

それにつけても、惜しまれるのは、香川県に生涯学習センターが無いことである。高松市には、都市再開発事業の中で、利便性の高いセンターが新設された。西の拠点丸亀市では、既存の施設を活用発展させてセンターとされた。香川県教育委員会でも生涯学習センター整備検討委員会等を設置して検討を重ね、構想をまとめたり、敷地の確保や建設計画の段階にまで進みながら、諸般の事情で実施に至らないまま、時期を失して今日に至っている。

地方財政の窮状やハコモノ行政の終焉、昨今のカルチャーセンターの衰退とインターネットの普及などを勘案すれば、在勤当時の私たちが県のセンターに寄せた期待は、ブーメランのように手元に返ってくる。むしろ、香川県の生涯学習センター的役割を本学のセンターが果たすことによって、広く県民は受益するのではないか。前述の生涯学習講座等のもとより、学内の人的諸資源をネットワークして教育、研究、調査、実践の機能を果たしていくことこそ今必要なのではないか。

過去を踏み越えてこそ、センターの発展がある、と私は期待する。